柴崎楓の空間固定

ふれんちとーすと

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「なんでこうなるんだよォーッ！」

これは、一人の少女の奇妙で愉快な物語である。

※不定期投稿及び、作者のリハビリ兼用の作品の為、更新が滞ります。他の作品のネタを思いついたり、文が纏まり次第そちらを更新します。

目　次

プロローグ ―――――――――――――――――――― 1
始まり ―――――――――――――――――――――― 5

プロローグ

さて、落ち着いたところで話を始めよう。
周囲の状況からだ。
廃工場で、隣に2人の少女・・・いや、美少女が縛られている。”恐らく”自身と同い年だろう。
とは言っても私は自分の年齢が分からない。

私は、柴崎楓。多分6歳。現在の住所はここ、この廃工場である。2歳くらいの時に、気味悪がられて捨てられて以来この廃工場に住んでいる。
ちなみに、名前は自分で決めた。本来の名前、というより、両親から呼ばれる名前があまり好ましくないのである。まあ、捨てられていい思いをする方もいないだろう。
さて、話を戻そう。周囲の状況、これが一番重要事項である。前方では、武装した大人数人、そして軽薄そうな笑みを浮かべたスーツの大人が一人。先程から、聞いてる話によると、氷村?というらしい。男は夜の一族と呼ばれる吸血鬼なのだそうだ。選ばれた人種だの、なんだの言いつつ隣の二人の美少女の片方、髪が長い子は自身の同族なのだ、と声を張り上げていた。
流石、吸血鬼。美人になるもんだな・・・と、私は思う。私?生まれてこの方顔を数度しか見たことがありませんか、煤で汚れてなんとも言えません。
「隠していれば、なんとかなるとでも思っていたのかい?どうにもなるわけないんだよ・・・お前も僕と同じさぁ!」
下卑た笑みをこちらに向ける。金髪の少女は、キッと睨みつけながら、声を張り上げ
「ふざけんじゃないわよッ!この根暗男ッ!どう見てもすずかとあんたは同類じゃないわッ!私の親友をバカにしないでッ!」
と、気丈に声を張り上げていた。かっこいいと言うか、男前である。

私は、それを聴きながら逃げる準備をしている。こっそりと自身を縛る縄を工場に落ちているガラスの破片を使って切って”もらう”。傍から見れば、ガラスの破片が独りでに浮いている怪奇現象状態であるが、気づかれなければどうということは無い。

「こんな関係ない子を巻き込んで・・・あんた最低よッ！」

待った、私に視線を向かせないでくれ。ほんと、待って。氷村は、私を見て機嫌が悪そうに唾を床に吐き散らした。

縄を切ろうとしているのに、気付いてはいないが・・・

「なら・・・君達に絶望をあげよう・・・やれ」

と、こちらに銃を向ける。狙いは・・・私だ。美少女2人の顔が青ざめていく。

「や、やめて叔父様ッ!?」

「な。なんでよ・・・本当に関係ないじゃないッ！やめ・・・やめなさいよッ！」

しかし、武装した男達は此方に銃を向け

「やれ」

撃ち放つ。2人には、蜂の巣になる私を容易に想像出来るだろう・・・そうならない。

私は、こういうのが嫌いだ。大の大人が、寄って集って子供相手に大人気ない真似をする。

「クラフトワーク」

気に入らない奴は、とりあえず・・・ぶっ飛ばせばいい。

瞬間、クラフトワークが迫り来る弾丸を弾いて地面に叩き落としていく。チャリ、チャリ、と地面に寂しげな音を立てて弾丸が落ちていく。

誰も一言も喋らない。そして、先程から静かにクラフトワークで静

かに切り続けた為に、縄はもう子供の私の力で解ける・・・否、切れる。
ブチッという音ともに、縄を切り解き立ち上がる。
静かにガラス片が音を響かせる。
「あなた〝覚悟〟出来てるんですよね」

1歩、また1歩、相手側に踏み込む。

「攻撃した、ということは・・・殺そうとしたということは・・・やり返されてもいいって言うことですよね？」
武装した大人達が一斉に銃を向け撃ち出すが、そうなることは分かっている。クラフトワークが、迫り来る銃弾を全て弾き飛ばし、受け弾く。

氷村という男は、足をガクガクと震わせながら唇を震わせている。隣に佇んでいるメイドは驚いたように固まっている。
「ィ・・・イレインッ！こいつを殺せーェッ！」
その瞬間、嫌そうにしながらメイドがこちらに攻撃を仕掛けてくるが、クラフトワークには悪手である。
人らしからぬ音を立てながら、クラフトワークによって腹を殴り上げられてメイドは〝固定〟される・・・空中でじたばたと動いても、私には当たらない。

「クラフトワーク」
そのまま静かに近づき、氷村の口を・・・顎をクラフトワークで殴りあげ固定する。
顎が固定したなら喋ることは出来ないだろう。つまり、
「命令することは、出来ない・・・あなたは、助けも呼べない」
空中で声にならない呻きをあげる哀れな男に、クラフトワークを構える。ここにいる誰もが私を見ていて、クラフトワークを見ていない・・・いや、見ることは出来ない。

「クラフトワークで固定したものに触れるとエネルギーが溜まる・・・例えば石を固定している場合、その石を優しくノックするだけで・・・固定を解除した瞬間に石は溜まったエネルギーによって、吹き飛びます」

わかりやすく教えながら、クラフトワークは腕を引き構える。普通では見えることのない、スタンドによる攻撃。

「あなたをボコボコに殴ったなら・・・どんな風に吹き飛ぶんでしょうね・・・」

ニッコリと、工場のホコリで煤だらけの顔を上げる。処刑人とはこういう気持ちなのかもしれない。

「絶望を返してあげますね」

瞬間、空気を撃つような音が連続して響き始める。氷村の顔が歪んで行くのが見える。建物から脱出しようと腰を抜かした大人達が逃げていく中、砕けるような音を響かせていく。

「さようなら」

解除されると同時にイレインと呼ばれたメイドは地面に落下し、氷村という男は凄い勢いで壁にぶち当たり、壁を軋ませめり込んだ。

「・・・あ、あなた・・・なん、なの・・・よ・・・」

金髪の少女が漏らした言葉にゆっくり振り向きながら、微笑みかける。

「ただの子供ですよ・・・お嬢さん」

誰かが、駆け込む音がした

始まり

柴崎楓の記憶は2歳半から始まる。
当時、彼女は父と母の3人暮らしで何不自由のない普通の生活を送っていた。
この頃、両親も少女にもたしかに幸福な日々があったと言えるだろう。
しかし、彼女の幸せは、それから3歳になるまで続くことはなかった。
彼女が記憶を刻み始めてから2ヶ月、父と母が他界する。
原因は、飲酒運転の一般車の追突である。一緒に乗っていた彼女は衝撃で気を失い、気がついた時には、両名他界して自分だけが入院しているという状況だった。

幼かった彼女は、もう両親に会うことが出来ないということだけは分かってしまい、ショックの余り感情が表に出づらくなってしまっていた。
しかし、不幸の連鎖は止まることはなかった。
数日後、施設に預けられるはずだった彼女は、施設に運ばれる矢先に闇に流されることになる。
施設職員の一人が、人身売買を行っていた為である。この人身売買は中々巧妙な手順を踏んでおり、狡猾に他の職員に気付かれること無く、何も知らない子供達を様々な場所へと売り捌いていたのである。

しかし、今回は少し様子が違う。

いつもは、ある程度吟味してから売り払う彼だが、如何せんクライアントから早くしろと期限迫られることもある。今回は、見事それが当てはまる。

期限に間に合わない故に、入る前の楓を横流ししてそのまま売り払う事にした、というわけだ。

心も体もボロボロでうんともすんとも言わない子供であったが、そのまま横流しされようとした時に、彼女に最大の転機が訪れる。

偶然にも、その現場を抑えに来た黒服の男達と、〝木刀を構えた剣士〟の様な男性がそのまま彼らに突貫するのである。現場に突入後、瞬く間に制圧する中で、その瞬間は訪れた。

「お前だけでも！」

凶弾が、楓に向かって放たれた。が、その弾丸は彼女に向かう最中、剣士のような男性が変わり身となり躍り出ることによって彼女は銃弾を受けずに済んだのである。

しかし、喜べることではない。

「ごっ、・・・はは、だい、じょうぶ、かい？」

血を吐きながら倒れてしまったその剣士に、彼女の心が大きく反応したのである。

このままでは、この人は死んでしまう。消えてしまう・・・両親のように。

嫌だ・・・

「止まってよ・・・！止まって！」

腹部から流れるそれを押さえつけながら少女は声を張り上げる。

「死ねぇぇぇぇぇ！」

さらに男が、取り押さえられながら弾丸を放つ。

このままでは、間に合わない。

「止まれぇーーーっ！」

声にならない声を上げながら、脳に強い衝撃を受けるような感覚と共に、それはそばに居た。
少女は、その時過去を思い出した。自身は、過去に生きていた人間であること。既に死んだはずであること・・・昔の自身の名前を、思い出したのである。
それの名前とともに

「クラフト・・・ワーク!」
迫り来る弾丸を弾き、そして彼女は驚きの行動に出る。

「クラフトワークッ!傷を固定しろぉ!止まれぇ・・・!」
彼女は、幹部に手を当て傷口を合わせるようにして、縫合するかのように固定したのである。
内臓まで達していて重大ではあったが、この固定がこの剣士の命を繋ぐ結果となる。この固定で止まったのは、その肉部分だけでなく、貫通した内臓に触れており、内部の出血を著しく抑えたのである。

その後、救護が来るまで持たせた後、少女は気を失い消え入るように倒れてしまった。

そして、このすぐ後、搬送途中の車の扉が”何故か”開き少女がそのまま飛び降りてしまったという。少女は、そのまま行方知れずとなってしまう。ただ、少女は終始申し訳なさそうにしていたことから、抱え込んでしまったと、思われる。

そして、彼女が飛び出した時、そこは陸橋の上、川の中に身を投げたらしい。探すにも重傷者がいるので、捜索はそのまま断念され搬送された。その後、必死の捜索も虚しく、少女は行方不明となった。
翌日の新聞の行方不明捜索欄に、真城　翔常（ましろ　かづね）という少女の捜索欄が追加された。

私は、もう翔常とは名乗らない。そう呼んでいい人は、今はもう、私を守ってくれたあの人しかいない。
今のままじゃ弱過ぎる。今のままじゃ何もかも足りない。
あの剣士の人にも、迷惑をかけてしまうだけだ。
なら、強くなるしかない。私は1人でも・・・必ず、強くなる。
少女は、幼い体を、他人に見えない相棒に抱き上げられながら、闇夜に消えていった。